

実践報告

学校図書館を活用した小学校国語科説明文の授業

——説明文教材の構成「はじめ・中・おわり」を
実感させる指導法に関する一考察——

Japanese Lessons for Teaching Descriptive Essays Using a School Library in
Elementary School:

A Teaching Method for Letting Pupils Realize the Structure of
“Introduction (*Hajime*) – Body (*Naka*) – Conclusion (*Owari*)” in Descriptive Texts

宮津 大蔵

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2017年9月28日 受理)

Ⅰ. はじめに

今回の学習指導要領に於いて、小学校国語科の学習は、教科書教材だけで終始するのではなく、学校図書館を活用し読書まで視野に入れた学習を重視している。

小学校学習指導要領解説 国語編（平成29年6月文部科学省）には、「読書指導の改善・充実」において——「読書は、国語科で育成を目指す資質・能力をより高める重要な活動の一つである。」とされたことを踏まえ、各学年において国語科の学習に読書活動に結び付くように〔知識及び技能〕に「読書」に関する指導事項を位置付けるとともに、「読むこと」の領域では、学校図書館などを利用して様々な本などから情報を得て活用する言語活動例を示した¹⁾。——とある。

また、「読むこと」の言語活動例として、——各学年のウには、主として学校図書館などを利用し、本などから情報を得て活用する言語活動²⁾——が例示されている。

しかし、このことは今回の学習指導要領で初めて言われるようになったわけではない。これまでも、教科書教材で学んだ技術を生かして「教材文の書きぶりを参考にして、説明文を自分でも書いてみよう」という活動がセットになる実践は頻繁に行われていた³⁾。

例えば、教材文が「はじめ・中・おわり」（序論・本論・結論）という構成になっていることを学習し、図書館資料等から情報を収集、加工し教科書と同じ構成で説明文を書くという実践である。

しかし、このような授業展開は、研究授業等特別な実践として行われがちで日常的に多くの学級で行われてきたとは言いがたい。それは、教師の負担の割には成果が上がらないことが多いためと考えられる。

その理由の一つとして、「はじめ・中・おわり」で書くと良いと指導されても、子どもにとっては、そもそもどういう良さがあるのかがわからないのではないかとすることが挙げられる。

「はじめ・中・終わり」となぜ、分けるの

か、分けることのよさを子どもが実感できる指導法が確立されていないため、図書館資料から情報を収集し、自分も「はじめ・中・おわり」を使って説明文を書いてみようと思いが喚起されない。教師にとっては労多くしてこう少なしという状況になりがちである。

説明文教材における論の展開の仕方の良さを子どもが実感できる指導法及び図書館を活用する必然性のある学習活動の確立が必要であると考えられる。

Ⅱ. 研究の目的

小学校低学年に説明文教材の「はじめ・中・おわり」の構成を実感させる指導法及び必然性をもって図書館を活用する学習活動を提案すること。

Ⅲ. 研究の方法

まず、説明文教材で「はじめ・中・おわり」の指導がどのように成されてきたかについて概観する。

続いて、それらの先行実践の検討を行い、「はじめ・中・おわり」が実感出来、読書に発展させる小学校国語科授業はどのようなものであればよいかということについて仮説を立てる。

さらに、その仮説に基づいた授業実践を観察、考察し、成果と課題を明らかにしていく。

1. 先行実践の検討

説明文教材を「はじめ・中・おわり」に分ける実践は数多く行われている。しかし、それを分けるのはなぜか、なんのために分けるのかと言うことを児童に理解させたのちに行っている実践は見当たらない。多くみられるのは次のような実践である。

様々な学習活動を通して以下のことを指導する。

(1) 形式段落をまとめて意味段落をつくる

小学校の説明的文章の多くは、「はじめ」「中」「おわり」の3つの大きなまとまりに分けられる。それぞれが形式段落でいうと何番目なのかを読み取らせる。

- ① 「はじめ」は、話題が提示され、中心内容が疑問文で書かれていることが多い。
- ② 「中」には、結論を導くための根拠が述べられていることが多い。通常、複数の根拠が述べられており、中A、中Bなどとする。
- ③ 「おわり」には、結論が述べられていることが多い。「まとめ」と「おわり」の二つに分かれている場合もある。

(2) 論理の整合性を検討する。

「中」で述べられている根拠が、正しく「結論」を導いているかを考えさせる。また、「はじめ」で述べられた疑問に対する答えが述べられているか確認させる。

また、それらの指導の後に、図書館資料等を参考に「はじめ・中・おわり」を使って文章を書かせる実践が数多くみられる⁴⁾。

しかし、「この構成で書くと論理的な文章になるという実感」を子どもが持てるかどうかという視点があるとは言いがたい。

2. 仮説

子どもが説明文の構成を実感できるような学習活動を工夫すれば、「はじめ・中・おわり」の良さを実感出来、読書に発展する学習活動が有意義なものになるのではないかと。

3. 仮説の検証

(1) 使用した教材文

「サンゴの海の生きものたち もとわかたつお」(光村2年)より

A サンゴの海には、たくさんの生きものたちが、すんでいます。それらの中には、たがいに、役に立つように、かかわり合って、くらしているものがいます。

どんな生きものたちが、どんなにかかわり合いをしているのでしょうか。海の中

をのぞいてみましょう。

Aが、「はじめ」の部分である。「問いかけ」の部分であり、表現活動ではニュースキャスターが担当する。

B 大きなイソギンチャクがいますね。細長いたくさんのしょく手をゆらゆらさせています。そのしょく手の間に、きれいなオレンジ色の魚がうかんでいます。クマノミです。

イソギンチャクのしょく手には、どくのはりがあります。イソギンチャクは、これで、小さなどうぶつをつかまえて、食べているのです。クマノミも、さされるとたいへんなことになります。でも、さされることはありません。クマノミの体は、ねばねばしたえきでおおわれています。これが、さされないひみつです。

クマノミを食べる大きな魚は、イソギンチャクをこわがって、近づいてきません。だから、イソギンチャクの中にいれば、クマノミはあぜんです。

イソギンチャクを食べにくる小さな魚がいます。クマノミは、この魚が近づいてくると、カチカチと音を立てて、おいはらってしまいます。こうして、イソギンチャクとクマノミは、たがいにまわり合っているのです。

Bは「中」の一つ目である。**A**（「はじめ」）で為された問いかけに対する説明（具体例）の一つとして「イソギンチャクとクマノミ」のかかわりが述べられている。表現活動ではレポーターが「中継」担当する。

C サンゴの海には、うつくしい魚がたくさんいます。ホンソメワケベラも、その一つです。明るい青色の体に、頭からしっぽにかけて黒いすじが一本あります。体の長さは、十二センチメートルほどです。

この小さい魚が、大きな魚の口の中に入っていくのを見ると、びっくりしてしまいます。でも、食べられることはありません。大きな魚たちは、体や口の中についた虫を、ホンソメワケベラがとって、きれいにそうじしてくれるのを、知っているからです。

ホンソメワケベラは、そうじ魚とよばれています。でも、ただ、そうじをしているわけではありません。ホンソメワケベラにとっては、そうじをしてとった虫が、食べものになるのです。

Cは、「中」の二番目である。**A**（「はじめ」）で為された問いかけに対する二つ目の説明（具体例）が述べられている。表現活動では、この部分もレポーターが「中継」する。

D このように、サンゴのうつくしい海では、たくさんの生きものたちが、さまざまにかかわり合っています。

Dは、「おわり」の部分であり、「文章全体のまとめ」という役割を果たしている。表現活動では、再びスタジオに戻ったことになり、ニュースキャスターが担当する。

以上のように「はじめ」、「中」、「おわり」という説明文の基本的な構成を成していると言える。

(2) 教師が作成した放送台本

子どもが学習の見通しがもてるようにモデルとして教材文を以下のように放送台本にリライトした。（後半のホンソウワケベラの部分は子どもに作成させるために、前半部分のみである。また、登場人物としてクマノミ、イソギンチャクの台詞を書いている。実際は縦書きである⁵⁾。）

キャスター サンゴの海には、たくさんの生きものたちがすんでいます。それらの中には、たがいに、やくに立つようにかかわり合って、くらしているものがい

ます。

どんな生きものたちが、どんなにかわり合いをしているのでしょうか。海の中をのぞいてみましょう。

ナレーター 大きなイソギンチャクがいますね。細長い たくさんのしょく手をゆらゆらさせています。そのしょく手の間に、きれいなオレンジ色の魚が うかんでいます。クマノミです。

イソギンチャクのしょく手には、どくのはりがあります。イソギンチャクは、これで、小さなどうぶつをつかまえて、食べているのです。クマノミも、さされるとたいへんなことになります。

でも、さされることはありません。

どうしてでしょう。聞いてみましょう。

クマノミ わたしたちクマノミは、大きな魚が来ても、イソギンチャクさんの中に入れば、あんぜんです。だって、イソギンチャクさんのどくのはりをこわがって、大きな魚も近よれないんですから。

わたしたちはだいじょうぶ。だって、体がねばねばしたえきにおおわれているからです。イソギンチャクさん、いつもありがとうございます。

イソギンチャク わたしたちこそ、クマノミさんには、かんしゃしています。だって、わたしたちを食べにくる小さな魚をクマノミさんは、カチカチと音を立てて、おいはらってくれるからです。ほんとうにありがとうございます。これからも、よろしくおねがいします。

クマノミ こちらこそ、よろしくおねがいます。

ナレーター クマノミと、イソギンチャクが たすけあうという、うつくしいゆうじょうでむすばれているのです。おどろきました。

キャスター このように、サンゴの海では、このように 生きものがかわり合っているのですね。

(3) モデルとなるニュース番組

2年生の児童の参考にするため、教師の台本をもとに、上級生にモデルとしてのニュース番組を作成させている。

単元の最初に、児童はこのビデオを視聴しており、これから行う説明文の学習では、最終的には自分たちもこのようなニュース番組をつくるのだという見通しをもっている。



写真1 キャスターが「はじめ」と「おわり」を担当する。



写真2 「中」の内容を報告するレポーター（右）とクマノミ役（中央）とイソギンチャク役（左）。

(4) 授業の概要

日時 2012年10月10日（水）第5校時

対象 東京都A区立B小学校2年H組

T1 今までどんな勉強してきたか教えてください。

C1 「サンゴの海の生きものたち」です。

T2 なぜ、勉強してきたのですか。

C2 テレビ番組をつくるためです。

T3 「しぜんニュースばんぐみをつくらう」（と黒板に書く。）

- T 4 どんな人が出てきますか。
 C 3 ニュースキャスター
 C 4 レポーター
 C 5 さかな
 C 6 海のいきもの
 C 7 ホンソメワケベラ
 C 8 サンゴ
 C 9 イソギンチャク
 C 10 クマノミ
 T 5 (発言の度に黒板に書く)
 T 6 教科書にのっている生きものだけでなく、本や図鑑を調べて、かかわりあっている生きものをみつけてニュースをつくるのでしたね。
 T 7 ニュースキャスターはどんなことを言いますか。
 C 11 こちらスタジオですと言う。
 C 12 現場の説明を簡単に言う。
 C 13 「はじめ」のことを言う。
 T 8 そうでしたね。(黒板に「はじめ」と書く。)
 T 9 では、



写真3 学習活動のワークシート集。子どもがつくった放送台本が含まれている。

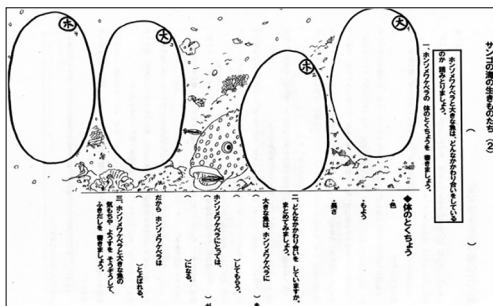


写真4 放送台本を書きやすいように教師が作成したワークシート。

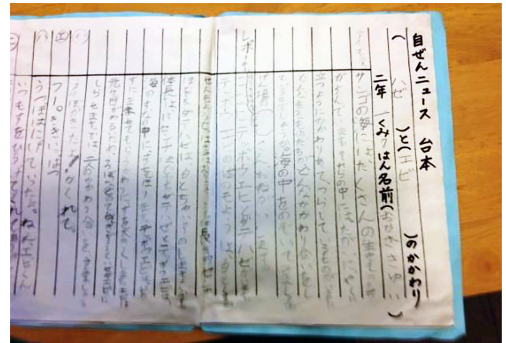


写真5 子どもが作成した放送台本。図書館資料を活用している。

(5) 考察

説明文の読みの学習に、表現活動を取り入れた実践はこれまでも多くみられている。ただ、子どもの意欲喚起のための楽しい活動として仕組まれたものであったり、教材文の内容から発想されたものに留まっているものがほとんどである。

本実践のように「はじめ」「中」「おわり」の区別を実感できるものは他にみつけることができなかった。

ただ、このことが論理展開の良さを実感できるところに関連しているかどうかは不明である。

IV. 結論と課題

1. 結論

小学2年生の児童に説明文教材の「はじめ・中・おわり」の構造を実感させるためには、「はじめ」と「おわり」をスタジオからのキャスターが報告し、「なか」を現場からレポートするという模擬ニュース番組をつくるという学習活動が有効である。

2. 課題

- ① 本実践は低学年児童には有効であった

が高学年にも有効であるかどうかはわからない。ただ、低学年の時に、一度経験すればよい。全校的な取り組みが必要である。

② この実践では「はじめ・中・おわり」の区別については、まさに実感することができたにとらえている。しかし、これが論理展開の良さを実感できているかどうかを判断するには、さらに検討する必要がある。

【注】

- 1) 小学校学習指導要領解説 国語編（平成29年6月文部科学省）p.10。
- 2) 同上 p.38。
- 3) 例えば、わたしはこう考える：説明文「インスタント食品とわたしたちの生活」の書き方を生かして書く 佐野育代 国語科授業論叢1号 p.72-75 2009 等。
- 4) 例えば、教育実践論文 学びの実感がある説明文の授業づくり～筆者の説明に対する問いを醸成する支援の工夫～ 山口大学教育学部附属山口小学校教諭・原浩一郎 等。
- 5) 実際は縦書きである。なお、読点の他に分かち書きをしてある箇所がある。
- 6) 東京都世田谷区立玉川小学校2012年度2年生担任の合作。